

21世紀の男らしさと女らしさ

野田俊作（大阪）

要旨

キーワード：

突然妙な話題から切り出して恐縮なのですが、仮性半陰陽という先天性の奇形があります。これは、遺伝的には男性であるのに、さまざまの事情で男性ホルモンが分泌されず、そのために体が女性になってしまうというものです。思春期になって、初潮が来ないというようなことで発見されることが普通なのですが、手術的に治療することになるわけです。そのときに、男性の体に戻すか女性の体に戻すかということが気になるのですが、これは女性の体に戻すのが原則です。女性の体に戻す方が外科的に簡単だということもあるにしても、それまで女性として育てられてきた人は、遺伝子のいかんとはかかわりなく、女性の体を持ち女性として暮らしてゆく方が自然だという心理学的な配慮からでもあります。

この例から私が言いたいことは、男性性なり女性性なりというものは、生物学的な雌雄とは、実はあまりかかわりがないものではないかということです。完全に無関係というわけではもちろんないでしょうが、一般に思われているよりもはるかに多くの部分が、社会的な定義のもとで、発達過程に形成されるものではないでしょうか。

考えてみれば、そもそも男性であるとか女性であるとかいったことは、すくなくとも心理学的には、その人の本質ではなく、属性であるにすぎません。それは、たとえば、氏名というものが、つきつめて考えれば、たとえば学校での出席番号と同じように、便宜上他と区別するための符号であるにすぎないように、たんなる社会的な約束ごとであるにすぎないのです。しかし、たとえば姓名判断というものがあって、出席番号であるにすぎない氏名を変えると人格の本質まで変わるかのような原始心性を利用して繁盛しているように、男女別というものにも、人々はなにやら神秘的な含意を感じとる傾向があります。

自分が男であるとか女であるとかいった信念から、生物学的に雄であるとか雌であるとかいったことに確実に根ざす判断を引算すると、残余のほとんどすべては社会的に期待されている役割であるにすぎないことがわかります。すなわち、われわれが男らしさなり女らしさという言葉で指示しているものは、実は男性と女性の社会的役割に関する意識的ないし無意識的な合意であるにすぎないのです。生物学的な雌雄というものは、人間という種においては、ほとんど積極的な意味を持っていないのではないかとさえ思えます。一度、男性役割なり女性役割なりというものをとっばらって、人間というベースでものを考えてみたらどうなるのだろうか。

男性と女性の役割分業のひとつに、父親と母親のそれがあります。数年前、ある婦人雑誌の記者が私にインタビューを申し込んできました。テーマは「育児における父親の役割」。そこで、「記事にならなくても知りませんよ」と念を押した上で、数時間のインタビューを受けました。結局

それは、私の予想どおり、記事になりませんでした。そこで私が言ったのは、父親の役割とか母親の役割とか、そんなものはない、両親が、おのおのの得意分野を受け持てばそれでいい、という話でした。実際私はそのようにして暮らしていますし、それでいっこう不便を感じたことはありません。

女性の社会的自立が今世紀後半の大きな主題のひとつでした。来世紀は、男性の家庭的自立が主題にならなければならない。妻に死なれたとたんに、あるいは逃げられたとたんに、なにもできなくて餓死するような軟弱な男性はいけない。男性も女性も、家庭内でも社会でも、自分を養えるだけの力量を身につけてゆかなければならない。男らしさとか女らしさとか、男だからとか女だからとか、そういう区別を脱却して、人間として生きはじめなければならない。21世紀がそういう時代になるかどうかは知りませんが、そうなればずいぶんと楽になるだろうと思います。

更新履歴

2012年6月1日 アドレリアン掲載号より転載